

氏 名 (本 籍)	米 沢 宏 (東京都)
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	博 甲 第 578 号
学 位 授 与 年 月 日	昭 和 63 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
審 査 研 究 科	医 学 研 究 科
学 位 論 文 題 目	単 親 家 庭 の 子 ど も の 精 神 衛 生 に 関 す る 研 究 (dissertation 形 式)
主 査	筑 波 大 学 教 授 医 学 博 士 小 泉 準 三
副 査	筑 波 大 学 教 授 医 学 博 士 小 田 晋
副 査	筑 波 大 学 教 授 医 学 博 士 澤 口 重 徳
副 査	筑 波 大 学 教 授 医 学 博 士 長 畑 正 道
副 査	筑 波 大 学 助 教 授 医 学 博 士 下 條 信 弘

論 文 の 要 旨

<目 的>

近年、離婚などに伴う単親家庭の増加は社会問題となりつつあり、またその子どもに及ぼす心理的影響も大きなものといえるが、そのような子どもの問題行動や精神障害などに関する調査は少なく、それらの特徴は必ずしも明らかにされておらず、対策も十分にたてられていないのが現状である。また単親家庭の親子関係の分析や検討は、多発する思春期の問題行動の背景にある家族・社会病理の解明の一助となるものと考えられる。本研究では、単親家庭の子どもの精神衛生上の問題点を、臨床事例の基礎的な資料の分析と検討およびその対策を目的としたものである。

<対象および方法>

対象は、昭和56年から昭和61年までの6年間に、筑波大学附属病院外来ならびに著者が関わる治療機関で扱った10歳から24歳までの臨床事例896例のうち、6ヵ月以上治療を継続した451例を対象とし、単親家庭事例45例と一般家庭事例406例に分け、これら2群について、初診時の問題行動、発症学年、発症契機、本人の性格、両親の性格、両親の養育態度、家族構成、症状の推移などを比較・検討した。また、両親の離婚、別居、死別などの差異についても治療経過から検討を行なった。さらに、単親家庭事例45例について、発症学年、単親となった時点から発症までの期間などの検討から類型化を試み、それぞれの代表的事例を提示した。

<結 果>

1. 単親家庭事例と一般家庭事例の初診時の症状で最も際立った差異は、単親家庭事例で家庭内暴力に代表される攻撃性と身体症状の訴えが多彩で非行との関連が強かった。発症契機では、単親家庭事例で親の離・死別をめぐる問題によるものが多かった。

2. 治療経過では、単親家庭事例で、攻撃性や身体症状の改善がみられた。また離婚・別居家庭事例よりも死別家庭事例の方が治療が長期化する事例が多かった。

3. 本研究の単親家庭事例を、親との離別あるいは死別から発症までの期間、および発症学年の2つの観点から、早発型、中発型、遅発型の3群に分けた。そのうち早発型は、離・死別後半年以内に発症するもので、すべて死別家庭であり、本人は抑うつ、ひきこもり状態になることが多かった。一方、中発型は、離・死別後3年以内に発症するもので、多くが離婚・別居によるものが多い。早発型、中発型のいずれの事例においても離別前から家族関係に病理性の見いだされる場合が多く、非行や攻撃性のほか、多彩な精神・身体症状が示された。それらに対して遅発型は、離・死別後4年以降に問題を起こすもので、離婚や別居あるいは死別によるものなどさまざまだが、本人の精神発達の未成熟さが特徴的であった。

<考 察>

単親家庭の子どもの問題行動や症状の特徴に触れた研究は少ない。本研究では、単親家庭事例で攻撃性と身体症状の訴えなどが示され、単親家庭事例の方が一般家庭事例よりも攻撃性などの面で治療効果がみられ、親子関係の修復が早いといえる。つまり、この症状の違いは単親家庭事例と一般家庭事例との親子関係や家庭内環境の病理性の差異を反映するものとして理解できる。

単親家庭事例の類型化からは、早発型では主に死別体験と発症との関係が示され、中発型では、離別をめぐる家族関係の問題が発症や問題行動と症状に影響を及ぼすこと、遅発型では本人の精神発達の未成熟な点が示唆された。従来、親が一人であることによるしつけ機能の低下と非行と関連性がいわれてきたが、この結果はむしろ離婚・別居をめぐる家族関係の葛藤と非行および本人の未熟な精神発達などとの関連性が示唆される。また離・死別直後に問題を起こさなくても、かなりの期間を経て問題を起こす事例があるわけで、単親家庭への環境調整や本人への精神療法的接近などの必要性が指摘できる。

審 査 の 要 旨

本研究は、近年社会問題ともなっている単親家庭の子どもの精神衛生とその対策に焦点をあてた研究である。単親家庭と一般家庭の多数の事例について子どもの精神衛生上の問題点を分析し、それぞれの事例の発症契機、症状、治療、予後などを比較検討し、更にそれらの発態の類型化をはじめて行なった研究結果は評価出来るものである。

本研究は今後とくに思春期の子どもの精神衛生学の研究分野において貢献することを期待する。

よって、著者は医学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。